Monthly Contents（月刊誌の主な特集記事）

ザ・クインテッセンス／2013．1月号

○歯髄における治癒＆治療のゴールを探るMI時代，その歯は本当に抜髄か？

―露髄歯を知り、診断する―　（泉　英之）

＊多くの歯科医師は、歯髄を保存することの重要性を認識しているが、露髄への対応は異なる。著者は、生物学的基礎研究からエビデンスに基づいて、日常臨床で実際に応用できる治療を多くの参考症例から提示している。歯髄の治癒は「感染の有無」と「歯髄の生活度（年齢）」によると結論づけているが，中でも歯髄保存に影響を及ぼす各要素の関係をグラフ化したものや感染の有無・歯髄症状・状況に応じての使用薬剤などの解説はとても参考になる。

日本歯科評論／2013．1月号

○<特集>インプラント治療のわかっていること，いないこと（Ⅱ）

――メインテナンスを踏まえたインプラント治療をどう考えるか

（小宮山彌太郎　山口葉子　他）

＊先月号に続く特集です。「上部構造の固定様式をどう考えるか」：スクリュー、セメントどちらを選択する方が有利か、「インプラント体の破折をどう考えるか」：なぜ破折は起きるのか、そしてどう防ぐのか、「インプラント周囲炎の原因をどう考えるか」：インプラント周囲炎においての細菌感染と過重負担の関係性を考察する、「フィクスチャーの形態をどう考えるか」：インプラント周囲炎とフィクスチャーの形態を考える、「Implantoplastyをどう考えるか」「インプラント治療における光療法の活用をどう考えるか」：インプラント周囲炎をどう治療するか―など最新の考え方を紹介します。

○はじめよう！　歯周外科――歯肉剥離掻爬術を確実に実施するためのポイント　1

（甲斐康晴　中島稔博　他）

＊5回にわたって連載する歯周外科、特に歯肉剥離掻爬術に的を絞って解説する新シリーズです。第1回は歯周外科の有効性、歯肉剥離掻爬術における切開・剥離の実際を症例をまじえながら詳しく解説しています。今一度歯肉剥離掻爬術についてまとめてみましょう。

デンタルダイヤモンド／2013．1月号

○新春スペシャル・シンポジウム歯周組織再生療法はどこまで身近になるのか

（和泉雄一　斎田寛之　武田朋子　宮本泰和）

＊歯周病の２０％は、外科的な歯周組織再生療法が必要といわれていることから、この治療法を身につければ、抜歯となるはずの歯を救うことができ、患者が受ける恩恵は非常に大きい。本シンポジウムでは、歯周組織再生療法の現状と未来の可能性をテーマに、４名の講師がそれぞれの症例を交えながら、治療法の術式、適応症、メインテナンスおよび問題点を議論している。

○上顎臼歯部へのアプローチを考える―安心・安全にサイナスリフトを行うには（柴原清隆）

＊上顎洞への骨造成は予知性のある治療とされるが、サイナスリフトはソケットリフトに比べて、ハードルが高く、回避しがちな手術の一つである。本稿では、サイナスリフトを行う場合の①診査、診断時の留意点、②耳鼻科との連携の必要性、③手術に使用する外科器具、補填材料及び血液由来材料、④手術の方法、⑤サージカルガイドの有用性について述べている。

歯界展望／2013．1月号

○成功に導くエンドの再治療とは10　歯根端切除術のキーポイントとは？

（牛窪敏博　大阪府開業）

＊なぜ外科的歯内療法が必要なのか？と言うより、なぜ外科的歯内療法が行われることなく抜歯になってしまうのか、と言う疑問が筆者には在ったようだ。代表的な歯根端切除術を例にあげ、またマイクロサージェリーの導入によっていかに成功率が挙がっているかを示している。

○力を読む　２歯周組織破壊と非機能的な力（倉田豊　埼玉県開業）

＊う蝕や歯周疾患の原因に目に見えない力の影響が隠されていることもある。今回、治療のためのリシェーピングという概念について述べている。咬頭嵌合位から機能咬頭が頬舌、前後的にもスムーズに滑走できるような自由度を与え咀嚼運動をイメージして歯冠形態を修正することとし、削合だけでなく、レジン添加なども行い、咬頭嵌合位の安定、機能運動の円滑化を図ることを目的としているようだ。